

『質的心理学研究』『質的心理学フォーラム』共通

## 図表の作り方・文献引用の仕方

2019年3月改訂版

### 1. 図表の作り方

#### 1.1 全般的な注意

- a. 書式設定はA4とし、上下左右それぞれに余白を3cm以上設ける。
- b. それぞれの図表ごとに別のページに作成する。
- c. 図表の数に制限はないが、図表の重複を避け、最小限度になるように努める。
- d. 図表の挿入位置は、原稿の本文中に地の文とは区別できるような形で、「(図1挿入)」などと記入して、挿入希望箇所を明示する。

#### 1.2 図の番号とタイトル

- a. 図には、図1、図2……といった通しの図番号をつけ、図のタイトルとともに、図の下中央につける。
- b. 図タイトルは図番号に続けて1文字分の余白の後に記入する。タイトルは本文を読まなくても図が理解できる程度の、最低限の必要事項を盛り込む。必要な場合には、図の注をタイトルに続けて書く。

#### 1.3 図の描き方

- a. 図は1/2以下に縮小されるので、そのことを念頭において作図する。無駄な余白は作らず、簡潔な図にするように努める。
- b. 手書きの図を使う場合には、黒インクで明瞭に描いたものをスキャナーで読み込んで、ファイルに含める。
- c. カラーは用いず、白黒で作成する。

#### 1.4 写真

- a. 写真は図扱いとする。
- b. デジタルカメラで撮影したものを使用する場合には、画像ファイルをワードファイル内に貼り付ける。印画紙に印刷された写真を用いる場合は、スキャナーで読み込んで、ワードファイル内に納める。使用する色は白黒に限る。タイトルをつけて、他の図と同様に原稿に含める。

c. 写真や映像を使用する場合は、そこに写り込んだ人々の肖像権およびプライバシーに配慮した加工を行うものとする。なお、科学的な目的のために調査協力者を特定しうる情報を掲載することが必要不可欠な場合は、調査協力者本人（あるいはその保護者、後見人）から書面で掲載への同意を得ることとし、論文にもインフォームドコンセントを得た旨を記載する。

d. 掲載決定に至った後、投稿者は画像データを論文本体とは別に提出する。

### 1.5 表の番号とタイトル

a. 表には、表1、表2……といった通しの表番号をつけ、表のタイトルとともに、表の上左詰めで記入する。

b. 表タイトルは、表番号に続けて1文字分の余白のあとに記入する。タイトルは本文を読まなくても表が理解できる程度の、最低限の必要事項を盛り込む。必要な場合には、表の注をタイトルに続けて書く。

### 1.6 表の作り方

a. 罫線はなるべく少なくして見やすい表にする。特に縦の罫線は、必要なとき以外は用いない。

b. 無駄な余白は作らず、簡潔な表にするよう努める。

## 2 文献の引用方法

### 2.1 本文内での文献の引用方法

a. 本文中での引用においては、著者の姓と出版年を明記する。日本語名以外の場合、本文中では原則としてカタカナ表記（漢字表記が通例の場合は漢字表記）とする。初出時に（ ）で原語表記を示すが、原語がローマ字での表記によらない場合は、カタカナ表記（もしくは漢字表記）のみとする。翻訳書の場合には、原則として邦訳の出版年と原著の出版年をスラッシュで区切って併記する。ただし、ローマ字表記の原語に限り、文末にカッコ内で引用する場合は、初出時から原語表記のみとする。

【例】 やまだ（2000）によれば……

尾見・川野（1996）によれば

ヴァルシナー（Valsiner, 2001）は……。ヴァルシナー（2001）はまた……。

ブルーナー（Bruner, 1998/1986）は、……。ブルーナー（1998/1986）はまた……。

バフチン（2002）によれば……。

デンジンとリンカン（Denzin & Lincoln, 1994）によれば……。

……と考えられている（Spradley, 1980）。

b. 3人以上の著者による文献の場合には、初出時には全員の名前を表記し、2回目以降は第2著者以下を、本文中では「……ら」を使って省略する。カッコ内での引用における省略も同様である。ただしローマ字表記の名前の場合には“et al.”を用いる。

【2回目以降の例】秋田ら（2001）は……。  
……と考えられている（Spradley et al., 1980）。

c. 同姓の著者がいるとき名前を加えるが、ローマ字表記の名前の場合にはイニシャルを加える。

【例】佐藤達哉（1999）は……。佐藤公治（2006）によれば……。  
R. W. ホワイト（White, R. W., 1979）は……。M. ホワイト（White, M., 1990）によれば……。

d. 同じ著者の同年の著作を引用する場合には、出版年の後に引用順にアルファベットをつけて区別する。引用文献表においても同じアルファベットを用いる。

【例】矢守（2003a）によれば……。また、矢守（2003b）では……。

e. 直接引用の場合には、著者の姓と出版年の後に引用元のページ数も明記する。

【例】「質的研究には、従来の自然科学的な研究の自明性をいったん括弧に入れて、そこから足を踏み出しつつ世界を見直してみようとする強い志向性があります。」（能智，2011，p.8）

## 2.2 文献リストに関する一般的注意

a. 引用文献は論文の最後にまとめて置き、見出しは「引用文献」とする。

b. 「引用文献」に記載された文献は本文で必ず引用されなければならない。また、本文で引用された文献は必ず、「引用文献」の中に記載されている必要がある。

c. 「引用文献」における記載の順序は著者（共著の場合は第1著者）の姓のアルファベット順とする。著者（第1著者）が同一の場合は、刊行年次が古いものから順に並べる。ただし、単著と共著が混在する場合は、単著を優先する。

【例】無藤隆 (2009) …… (1番目)  
Muto, T., & Minami, H. (1995) …… (2番目)  
無藤隆・麻生武 (1998) …… (3番目) の順

d. ローマ字表記の文献の場合、著者名はカンマで区切り、“&”の前にもカンマをつける。和文の著者名は、“・”で区切る。文字数にかかわらず姓と名の間にスペースをあけず、続けて書く。

e. ローマ字表記の雑誌名・書籍名は、斜体（イタリック）で印字する。また、言語のいかなによらず巻数は斜体とする。

f. ローマ字表記の論文名・書籍名については、先頭に位置する語、およびコロンの（:）の

直後の語のみ、最初の文字を大文字とする。ただし固有名詞の場合は、位置に関わりなく語頭の文字は大文字になる。また、ローマ字表記の雑誌名は、冠詞や短い前置詞を除いて語頭の文字をすべて大文字にする。

g. 論文名・書籍ともに副題も省略せずに記載する。日本語文献の場合、副題は原則として2文字分のダッシュ“—”に続けて記載する。副題のあとには何もつける必要はない。ローマ字表記の文献の場合、副題は原則としてコロン“:”に続けて記載する。

h. ローマ字表記の場合、1つの単語をハイフンでつないで2行にわたって書くことは避ける。

### 2.3 引用文献の記載の仕方

原則として以下の通りとする。ただし原則に従いがたい場合は、原則に近い形式で記載をする。その場合、編集委員会で検討・判断し、記載方法を指示することがある。なお日本語・英語以外の文献（翻訳されていないもの）を引用に用いた場合は、可能であれば原語表記をし、（ ）内に日本語訳を付ける。ただし原語表記がフォント等の問題で困難であれば、日本語訳だけを表記し、最後に使用言語を（ ）で示す。

a. 雑誌論文の場合：著者名（刊行年次）論文題、雑誌名、巻、ページ。巻数は、斜体で表記する。なお、通巻でページ付けされていないものに限り、巻のあとに号数を（ ）でくくって表記する。また、巻のない雑誌については、号数を“*No. 3*”のように示す。

【例】伊藤哲司(2012)「平等」のなかの貧困——ベトナム・フエの水上生活の家族たち。発達心理学研究, 23, 375-383.

大谷尚・無藤隆・サトウタツヤ(2005)質的心理学が切り開く地平。質的心理学研究, No. 4, 16-38.

Pearce, A., Clare, L., & Pistrang, N. (2002) Managing sense of self: Coping in the early stages of Alzheimer's disease. *Dementia, 1*, 173-192.

b. 書籍の場合：著（編）者名（刊行年次）書籍名。出版社名（必要に応じてシリーズ名や叢書名。日本語文献以外は出版地も明記）。

【例】やまだようこ（編）(2000)人生を物語る——生成のライフストーリー。ミネルヴァ書房。

川喜田二郎(1967)発想法。中央公論社（中公新書）。

McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (Eds.) (1998) *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation*. Washington, D.C.: American Psychological Association.

c. 翻訳書を引用に用いた場合：原著情報も（ ）内に記入する。ただし原著がローマ字表記・漢字表記によるものでない場合は、原著情報は省略できる。

【例】ブルーナー, J. S. (1998) 可能世界の心理（田中一彦, 訳）。みすず書房。（Bruner, J. S. (1986) *Actual minds, possible worlds*. Cambridge: Harvard University Press.）

バフチン, M. (2002) バフチン言語論入門（桑野隆・小林潔, 訳）。せりか書房。

d. 書籍の一部の場合：著者名 (刊行年次) 引用部分のタイトル. 編者名 (編), 書籍名 (引用部分ページ). 出版社名 (必要に応じてシリーズ名や叢書名. 日本語文献以外は出版地も明記).

【例】 工藤庸子 (1996) 草稿を読む. 川本皓嗣・小林康夫 (編), 文学の方法 (pp.193-212). 東京大学出版会.

McDermott, R., & Varenne, H. (1998) Adam, Adam, Adam, and Adam: The cultural construction of learning disabilities. In H. Varenne & R. McDermott (Eds.), *Successful failure: The school America builds* (pp.25-44). Boulder: Westview Press.

#### 2.4 電子媒体の引用に関する一般的注意

a. ここで電子媒体とは、インターネット上でのみ読める電子ジャーナル、ニュースレターの記事、組織や個人のホームページ上の記事といった媒体を指す。一般の文献と同様に、「引用文献」中に記載する。

b. ローマ字表記のジャーナルまたはニュースレター名は斜体 (イタリック) で印字する。また、言語のいかんによらず、巻数は斜体とする。

c. URLを記載する場合、1行に収まらないときには、スラッシュ (/) のあとで改行する。また、一般の文献の場合と同様、ローマ字表記の場合、ひとつの単語をハイフンでつないで2行にわたって書くことは避ける。

d. 日本語表記・ローマ字表記以外の場合、「2.3 引用文献の記載の仕方」を参考に記載する。その場合、編集委員会で検討・判断し、記載方法を指示することがある。

#### 2.5 引用した電子媒体の記載の仕方

a. 電子ジャーナルやニュースレター記事の場合：著者名 (刊行年次, 日付) 論文または記事タイトル. ジャーナルまたはニュースレター名, 巻号 [なければ略], URL (情報取得年月日)

【例】 東京太郎 (2001, 7月) インターネットを通じた障害者家族のカウンセリングの試み. ヘルスケアニュース, 3(2), <http://www.telehealth.net/subs/newslet4.html/> (情報取得2004/01/25)

Smith, B. L. (2000, March 7) Cultivating positive emotions to optimize health and well-being. *Prevention & Treatment*, 3, <http://journals.apa.org/prevention/vol3/pre0030001a.html/> (情報取得2003/12/01)

b. 組織や個人のホームページ上の記事：著者名または組織名 [不明の場合には記事タイトルから開始] (発表年次, 日付 [ともに不明の場合には, n.d.]) 記事タイトル. URL (情報取得年月日)

【例】 文部科学省 (2003) 生徒指導上の諸問題の現状について. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/12/03121902.html/](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/12/03121902.html/) (情報取得2004/08/15)

Clark, L., McDonald, R., & Nixon, D. H. (n.d.) Technology and education: New wine

in new bottles. <http://www.columbia.edu/publications/papers/newwine1.html/>  
(情報取得2004/07/06)

躁うつ病との出会いと闘い (n.d.) <http://square.umin.ne.jp/tadafumi/YK.html/> (情報取得2003/11/30)

c. 本文中で言及する際には、次のように記載する。

【例】 文部科学省 (2003) は……

クラーク, マクドナルドとニクソン (Clark, McDonald, & Nixon, n.d.) は……

「躁うつ病との出会いと闘い」 (n.d.) によれば……